

ワークの進め方

☞「ワークの特徴・考え方」も参照のこと

1 課題Ⅰと課題Ⅱの取り組み順について

課題ⅠとⅡは、それぞれ助詞挿入と動詞挿入という異なる学習課題なので難易度の比較はできません。どちらの課題から始めることもできますが、解説の【使い方】でも触れたように、文脈から語を想起するという点では、動詞挿入の方が難しいかも知れません。その点では、助詞穴埋め⇒動詞穴埋め、という順の方が、解答しやすいかと思われます。またその場合でも、①課題Ⅰの問題1を行った後、課題Ⅱの問題1を行う ②課題Ⅰをすべて終了後、課題Ⅱを行うという2つの進め方があります。①の場合は、助詞穴埋めで文章の動詞部分を読んでいるので、スムーズに動詞穴埋めが進むと思われます。しかし内容を覚えてしまっているため、推測という学習要素は薄くなります。②の場合は、課題Ⅰをどの程度の期間で終わるかにもよりますが、課題Ⅱの学習まで時間が空くので程よい推測ができるかもしれません。ことばのテーブルでは、課題Ⅰを半分ほど終えたところで、課題Ⅱを平行して採り入れて行くようにしています。この場合、同じ文章に触れるまで、一定の時間が空き、また同時進行で2つの課題を学習するので、各課題の関連性を意識してもらいやすいという利点があります。

2 解答について

課題ⅠとⅡは、同じ文章がペアになっているので、それぞれを解答例として用いることができます。(※解説【構成】参照)しかし、あくまで解答の一例です。同じような内容を伝えるのでも、読み手の視点の取り方やイメージの持ち方によって、さまざまな文章表現が考えられるからです。そのため、助詞問題／動詞問題とも、正答としてよい解答は複数考えられます。以下に例をあげます。

課題Ⅰの問題①「フェリー」より、雪()何日()降りつづき の部分は、原文は、雪(は)何日(も)降りつづき ですが、雪(が)何日(も)降りつづき、でも、雪(は)何日(か)降りつづき、でも文章的におかしくはないので、正答です。これは、動詞問題も同様で、同じく課題Ⅱ：問題①「フェリー」の、雪に()れた道をだれかが()てくるのです。 の部分は、原文は、雪に(うもれ)た道をだれかが(あるい)てくるのです。 ですが、雪に(かくれ)た道を、だれかが(やっ)てくるのです。でもOKです。文法的に正しく、かつ文章内容としておかしくなければ、どのような語でも正答と考えることができます。◆これに対して、準正答と呼べるような微妙な解答もあります。助詞問題で例をあげると、やはり「フェリー」で、原文：雪は何日も降りつづき野原(は)まっ白になりました。 の、(は)の部分の助詞を、野原(が)まっ白になりました。 とした場合、文法的に誤りとはいえませんが、“野原”は物語の舞台として設定されているので、“取り出し”の働きとなる「が」よりも、“主題提示”の「は」の方がより良いと思われます。(※助詞「は」と「が」は、とくに使い分け難しい問題です) 動詞問題も同様で、やはり「フェリー」の原文：ぼんやり遠くを(ながめ)ていたフェリーは の(ながめ)の部分の動詞を(みつめ)ていた とした場合、「ぼんやり」という心理表現の副詞に、集中を伴う「見つめる」動作は、そぐわないと思われます。このような微妙かつ日本語としての高いレベルの解答判断については、学習者のレベルに合わせて、そのまま正答としたり、修正したりしていただければと思います。

3 文章音読について

課題Ⅰ・Ⅱとも解答後に完成した文章を学習者に音読してもらいますが、ことばのテーブルでは、文章全体の音読は指導者が行い、学習者には、()の穴埋め部分だけを(合いの手を入れるように)読んでもらうこともあります。また、各課題を解く際に、()の直前までを指導者が音読し、後続のことばを考えてもらう、という進め方をする場合もあります。いずれも文章の持つプロソディによる援助を狙いとしています。 ☞「ワークの特徴・考え方」3.プロソディ参照のこと